



「住民と行政との共働で取り組む逢妻女川でのクリーン活動」の様子

【普及啓発・広報編】

case
06

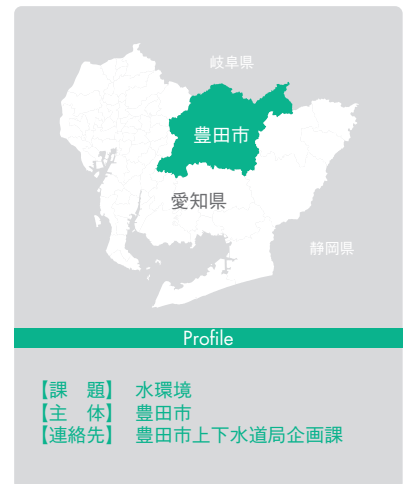
豊田市(愛知県)

地域が支える流域の水循環

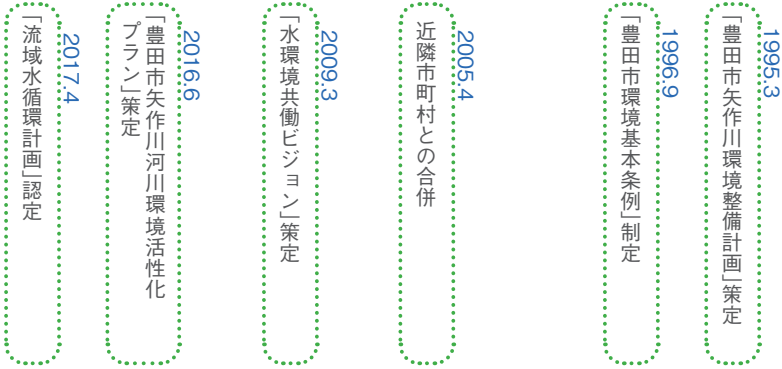
水環境改善の取組を共働・連携により市内全域に拡大

水環境の改善に向けた住民の意識を高めるため、ホームページや冊子等の広報媒体を活用した普及啓発、森林や川の現場での実体験を通じた啓発と人材育成、また目に見えない下水道への関心を高めるためのデザインマンホールやマンホールカードなどのユニークなPR活動を展開しています。

豊田市は、市内の水環境を改善し、次世代へ良好な水環境を受け継ぐために、「地域の水環境への取組が大きな流域の水循環を支える」というボトムアップ型の考えを基本とする「水環境共働ビジョン」を2009年に策定しました。水循環・水環境に関わる4つの視点(水質、水量、生態系、水辺)から、豊田市の水に関わる現状や課題を住民と共有認識し、身近な水環境を良くするための施策や取組を共働により推進しています。



2020 | 2010 | 2000 | 1990



計画の概要

水環境共働ビジョン
 ↳ 地域が支える
 流域の水循環 ↳

これまでの取組

「地域の実力で流域を変えていく」

豊田市は愛知県の中央部に位置し、2005年4月の近隣町村との合併を機に、矢作川の上流域も市域となり、市の大部分が1級河川矢作川流域に含まれています。

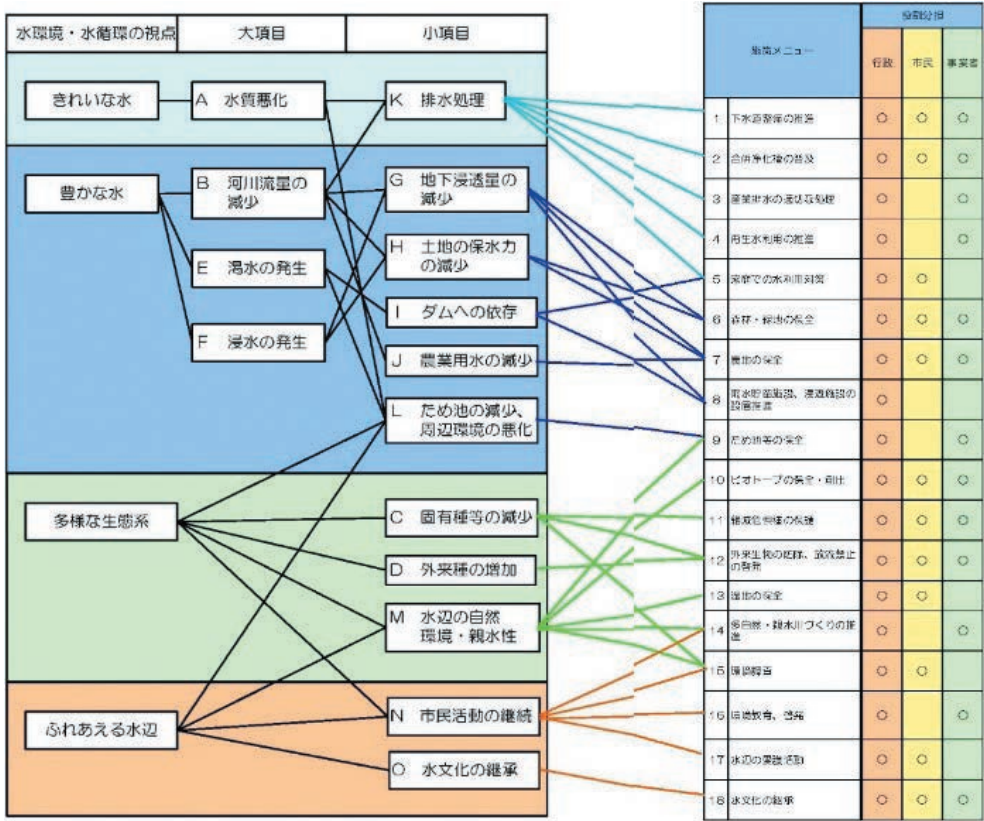
豊田市は、「地域の水環境への取組が大きな流域の水環境を支える」という基本的な考え方のもと、次世代へ良好な水環境を受け継ぐために、「水環境共働ビジョン」を2009年3月に策定しました。

本ビジョンは、「人がふれあひ生き物をはぐくむ豊かで清らかな水辺の継承」を目的とし、水循環・水環境に関わる4つの視点(きれいな水、豊かな水、多様な生態系、ふれあえる水辺)から、現状や課題を整理し、具体的な取組として施策メニューや、ビジョン実行の担い手となる行政、住民、事業者の果たす役割を提示しています。

水循環や水環境の改善に向けた活動は、豊田市内の中小河川流域や自治区といった生活に密着したスケールから始め、共働・連携により全市域、矢作川流域に拡大していくことが期待されています。



水環境共働ビジョン

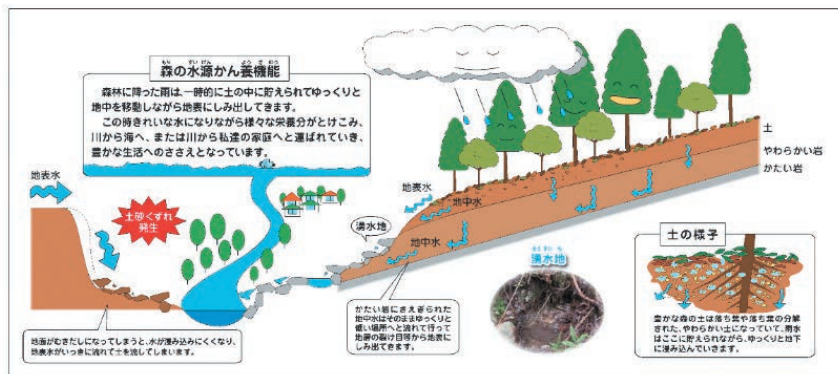


水環境共働ビジョンにおける水環境・水循環課題と施策メニュー

流域マネジメント、ここが「鍵」

「鍵」その1
「水道水源保全基金」を活用した水源林や森の
かん養機能をPR

水道料金を原資とする全国初の基金として、1994年4月に「豊田市水道水源保全基金」を創設しました。水道使用量1トン当たり1円相当額を積立て、水源となる森林保全に充てられています。



「水道水源保全基金」の仕組みと森の水源かん養機能の紹介



「水源の森」学習ひろば

主な活用としては、荒れた人工林の水源かん養機能を高めるために間伐を行うほか、水道水源地域の重要性を伝えるために「水源の森」を整備し、間伐効果のPRや豊かな自然を楽しめる散策道を提供しています。

「鍵」その2
キャラクターや教材・冊子等で幅広い層に
水への関心を喚起

流域の健全な水循環の構築に向けては、普段何気なく使っている水に対する住民の意識を高めることが大切であり、水道キャラクターの「ぴっちゃん」、下水道キャラクターの「ミカホちゃん」の案内による冊子やチラシ、ホームページを通じた普及啓発に取り組んでいます。

また、ホームページやチラシ等を通じて、水環境の改善に寄与する下水道接続や合併処理浄化槽への切り替えについてもミカホちゃんが呼びかけています。



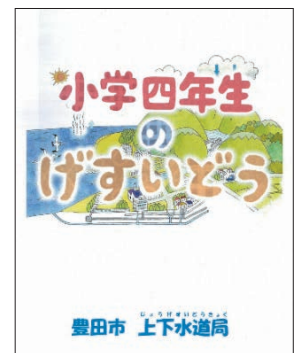
上下水道キャラクターによる普及啓発



水源の森散策パンフレット



ミカホちゃんによる下水道サポーター認定証書



下水道出前講座の教材

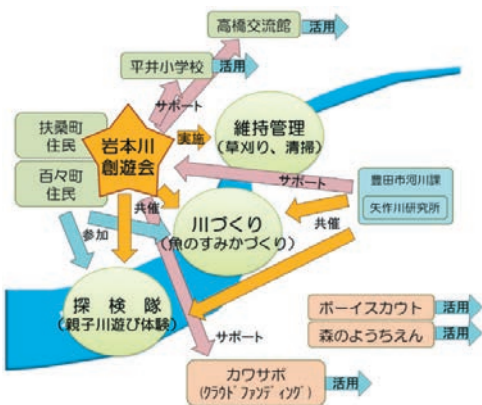
「鍵」3 住民による「ふるさとの川づくり」

「ふるさとの川づくり事業」は、環境が悪化し人々が近づかなくなった市内の小川を、地域住民による多自然川づくりによって、地域に愛される「ふるさとの川」にしていこうと豊田市の事業です。土砂が溜まりにくく、生きものがすみやすく、親子が遊びやすい小川として再生・維持することを目指しています。

岩本川をモデル地区として、2015年からこの事業による取組が進んでいます。豊田市矢作川研究所が行政の立場で取組のサポート、実施内容の記録、アンケート調査等による住民意識変化の分析などを担いながら、住民懇談会を通じて地域住民が描く川の未来の姿を共有し、川づくりの体験会の開催、地域住民が主役の活動団体「岩本川創遊会」の設立、そしてこの団体による毎月の草刈り、ごみ拾い、川づくり作業、川遊び体験会等が開催されています。また地元小学校の授業と連携することで、地域の子ども達も活動の担い手となっています。併せて、この事業を豊田市内の他地域へと展開していくためのノウハウや経験を蓄積しています。



川遊び体験「岩本川探検隊」の様子



岩本川における実施体制

「WE LOVE」とよだ ふるさとの川づくり 始まっています

ふるさとの川づくりとは? 平成27年度に策定された河川利用計画で岩本川をモデル川として「ふるさとの川づくり」事業を試行しています。扶養用自治体の皆さんとともにワークショップ（住民懇談会）、川遊び体験（岩本川探検隊）を開催し、岩本川の様子を聞き、今を鑑み、未来を描き、具体的な改善イメージを作成しました。今回は事業概要とこれまでの取り組みを紹介いたします。この成果をもとにして、今年度は住民の手によるふるさとの川づくりの実践に着手する予定です。岩本川はこれからご期待ください。

6月 第1回ワークショップ 岩本川の「これから」

7月 岩本川探検隊

9月 第2回ワークショップ 岩本川の「これから」

10月 岩本川探検隊

12月 第3回ワークショップ 岩本川の「これから」を「どのように」

今年度川づくりに挑戦!!

岩本川を語ろう! 岩本川を語るワークショップを開催しました。参加者からは「土砂が溜まりやすくて、コブコブとした。モクモクがたまり、うきもあがってむくむく、ワグもあがってむくむく。」、「コンクリート護岸は4m×1mのやつ。橋が全部壊れたらどうするのかわからない。」「川が深くなると、魚が住めなくなってしまう。」「ウチで釣ると、サメ、五匹釣って一と一と釣って、イターンと釣って。」

未来希望図を描こう! 今年度から実施する「ふるさとの川づくり」事業は、住民が主体的に参加し、未来の川を描くこと。大人数で集まり、未来の川を描くワークショップを開催しました。参加者からは「土砂を減らす工夫をしよう」、「安全への配慮、手当てをしよう」、「花見や釣りがしたい」、「子どもが遊べる川にしたい。」

具体化しよう! 今年度から実施する「ふるさとの川づくり」事業は、住民が主体的に参加し、未来の川を描くこと。大人数で集まり、未来の川を描くワークショップを開催しました。参加者からは「土砂を減らす工夫をしよう」、「安全への配慮、手当てをしよう」、「花見や釣りがしたい」、「子どもが遊べる川にしたい。」

小川が抱える問題

「川に土砂がたまると、大雨のときに水が溢れにくくなってしまいます。しかし、溢れすぎると土砂が溜まり、生き物の繁殖にも悪影響が。生き物の繁殖も必要。土砂が自然の力で取れるような川づくりはできないだろうか。」

「土砂を減らすのはいいけど、毎年かかったら、また土砂がたまってしまうのではないかな。養護も増えているし、川があふれてしまわないか心配。」

「川をのぞくだけでも水質は見えない。川で遊ぶ子どもも少なくなっている。自然が豊かであるが、川を遊ばせることはできないだろうか。」

みんなで力を合わせて解決しよう

土砂がたまりやすくて、水が溜まりやすい川
土砂がたまり、水が溜まりやすい川
土砂がたまり、水が溜まりやすい川

「あしたから（矢作川研究所）が、お手伝いします。」

その川らしい植物の生態環境づくりサポート 活動に伴う社会実証化人づくりの研究

岩本川探検隊（川遊び体験）

MISSION 岩本川を体験せよ!

こんにちは、岩本川探検隊のみなさんです！学校が夏休みに入ってから、探検隊が発足。岩本川で遊んで育て、ボーイスカウト経験のある隊員を筆頭に、大人たちが若い親子の川遊びをサポート。「石の上って滑るんだ」「砂がサラサラ」「さかながいっしょい」川に入れば大人も子どもも無い、みんなが「がた、がた」には仕事なので魚の名前を教えるけれど、何かを教える必要はない。魚の名前を覚えなくても、青色の魚でもいい。白黒のドジョウで構わない。見て触れて感じたことはいまでも心に残る、それでもいいんです。

豊田市が住民と共働で取り組む岩本川での「ふるさとの川づくり」

流域マネジメント、ここにも「注目」

注目1 ミライを担う若者への意識啓発プロジェクト

地元の豊田工業高等学校の4年生を対象に、2018年度から上下水道に関し、上下水道局職員が講師となり授業を行っています。講義内容は、上下水道事業に関する歴史、計画、工事、経営等、幅広いテーマを取り扱い、期間としては約半年間にも及びます。

講義を通じた上下水道事業の普及啓発への参加は、特に上下水道局の若手職員にとっては業務に対する意識向上に貢献し、若手職員同士の勉強会が発足するなど波及効果も生まれています。

その他にも、小学4年生を対象とし、水循環の大切さを伝える「下水道出前講座」の実施や小学生とその親を対象とした水循環を体感する取

組「上下水道親子探検隊」を夏休み期間中に行っています。

注目2 アカミミガメ防除プロジェクト

ミシシッピアカミミガメは、北アメリカ原産の外来種で、ペットとして持ち込まれた個体が捨てられ、野外で増えており、水生植物・農作物の食害などの悪影響が懸念されています。

豊田市は、2016年より環境省が推進している「アカミミガメ対策推進プロジェクト」に参画し、逢妻女川と逢妻男川の市域区間を対象に、住民と企業・大学・行政が連携してアカミミガメ防除に取り組んでいます。

また、これまでの活動成果を「地域のみんなで身近な自然を育むために〜アカミミガメ防除マニュアル〜」としてとりまとめ、外来種対策の必要性、アカミミガメの捕獲方法や作

業する際のポイント、カメの見分け方、地域での取組事例などを紹介し、地域住民に対し外来種防除の啓発を行っています。

注目3 プレート式デザインマンホールでワクワクする下水道を演出

下水道の見える化と、歩いて楽しい歩行空間演出を目的に、名鉄豊田市駅から豊田スタジアムの間に「プレート式デザインマンホール」を22箇所設置し、地域住民や豊田スタジアムを訪れた市内外の方々に人気となっています。

デザインが簡単に交換できるという特徴を活かし、季節やイベントに合わせて

不定期にデザインを変更し、「ワクワクする楽しい下水道」を住民に伝える工夫をしています。

注目4 災害備蓄用飲料水「とよた水物語」

豊田市上下水道局では、ペットボトル水「とよた水物語」を販売しています。このボトル水は、市内浄水場で採取した水道水を活性炭フィルターでろ過し、加熱処理をした上で密閉しているため、常温で長期保存が可能です。

豊田市では、飲料水の備蓄として「一人3リットルを3日分(9リットル)以上」を住民に呼びかけ、ホームページやチラシ、また上下水道施設の施設見学会等での配布を通じて、水道水のおいしさと防災の両面からPRしています。



豊田市上下水道局職員による授業
(上：講義風景 下：上水道施設見学)



アカミミガメ防除マニュアル



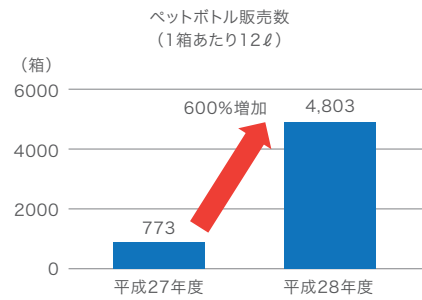
プレート型マンホール



災害備蓄用ペットボトル水「とよた水物語」

活動の果

備蓄用
ペットボトル水
「とよた水物語」が
大好評



「とよた水物語」販売数の変化

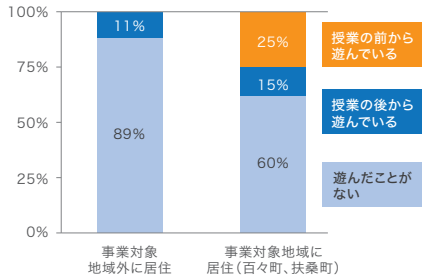
大規模地震や風水害などの自然災害により上水道施設への被害が危惧されます。万が一の断水に備え、豊田市上下水道局では、2013年度から5年間保存可能なペットボトル水「とよた水物語」を販売しています。ただ、販売開始当初は売り上げが伸びず、市民の備蓄率がなかなか向上しない状況が続きました。

そこで、2016年度に備蓄率向上を目的としたプロジェクトチームを立ち上げ、これまでに培ったPRやマーケティング手法を活用することで、前年比600%の売上増加を達成することができました。

保護者アンケート

岩本川で子どもと遊んでいるか？

岩本川近隣小学校の2年生の保護者48人の回答より



岩本川近隣小学校の保護者アンケート結果

ふるさとの川づくりの効果

地域住民による川づくりが進んだことで、人を寄せ付けなかった岩本川は遊びやすい川となり、近くの小学校の授業でも川が活用されるようになりました。岩本川での授業を本格的に始めた年の保護者アンケートでは、子どもが授業を受けた後に、親子で岩本川に遊びに行った家庭が1割超あり、岩本川での授業が身近な自然体験機会の創出につながることが示されました。

さらに、この年の学芸会では授業を受けた2年生が、地域の伝承と岩本川での川づくりを題材にしたオリジナルの劇を創作・披露するなど、ふるさとの川づくり事業によって地域愛着が醸成されています。

メッセージ



豊田市上下水道局企画課
久保 剛さん

取組を伝え広げていくポイントとは？

水環境の取組は、市民と地域の環境や将来を楽しく考え、地域が抱える課題とともに解決し、市民とふれあい、地域の水環境を共有することが大切です。水環境に関する市民活動を発信することで、新たな地域での活動に広がっていくと考えています。

今後に向けて

今後は、国土交通省が提唱している「下水道の市民科学」という新たな視点を取り入れ、地域住民と連携し、新たな下水道の価値を発見できるように下水道の普及啓発を進めていきたいです。

メッセージ



豊田市矢作川研究所
※現所属 豊田市環境政策課
山本 大輔さん

取組を伝え広げていくポイントとは？

川や生き物そして人に関係する事象はひとりひとりの経験や知識により考え方が異なる場合もあります。しかし、川に関する取組は様々な人々と力を合わせて進めていくため、みんなで納得することが重要です。そのため、きちんと記録をとり、科学的なデータを共有していくことが鍵となると考えています。こうして積み上げた根拠は、さらに新たな取組へとつながっていくと考えています。

今後に向けて

川と人の関わりにおけるミライのフューは昔の姿への回帰ではないかと思っています。暮らしの中で川や水を使うからこそ、尊敬や愛着の気持ちを持って、手入れが行われていたのでしょうか。ですから、川で遊んだり自然を再生したりと、分かりやすく川と触れ合うことを通して、身近な小川が再び地域に愛され育まれる「ふるさとの川」へとなるように支援を続けていきたいです。